

# 『觀世音菩薩授記經』と『法華經』

大 南 龍 昇

『觀世音菩薩授記經』（以下、觀音授記經と記す）一卷は劉宋黃龍國沙門曇無竭の訳出したもので、師は釈法勇の名で『出三藏記集』卷十五の僧伝に連ねている。その記述によれば、劉宋の永初（四二〇—四二二）の年、同志二十五人とインド旅行に出発、罽賓に数年停まり、この間に胡語を修得、この地で『觀世音授記經』を入手、後に中インドを経て、南インドから海路で元嘉末年（四五三年）広州の楊都に帰国、本經を翻訳したという。旅行中、同行の多くを失い、最後は五人となった。道中、さまざまな危難に遭遇したが、ひたすら本經を念じ、諸難を免れたとも記す。

本經は經題にある如くに觀世音菩薩の行と授記に至る本生説話を内容とする。觀世音菩薩が登場する主要な大乘經典には浄土教經典と『法華經』、それに『華嚴經』入法界品、密教經典等も挙げられるが、特に本經の場合、前の二經に多くの影響を受けているかに思われる。従来、本經が學者に注目された第一点は、浄土教經典の一つとしてであり、また觀世

音菩薩の所説に關してであつた。取り分け浄土教研究者が關心を示したのは、本經とその異訳の施護等訳『如幻三摩地無量印法門經』（以下、如幻三摩地經と記す）に見られる阿弥陀仏と觀世音と得大勢（勢至）兩菩薩の本生話で、本經が釈迦と二菩薩の本生を説くのに対し、異訳は弥陀と二菩薩の本生に改変された点である。そしてこの阿弥陀仏本生が無量壽經系の法藏説話と異つた伝承の一つとして注目された。第二点は、異訳の如幻三摩地經にチベット訳 Hphags-pa sgyu-ma la-buñi tin-ñe-hsün ces-bya-ba theg-pa chen-pohi mdo（北京版七九八番）があり、Arya māyopama samādhi nama mahāyāna sūtra（如幻三昧經）なる經題を有する如くにこの二經は觀音、勢至等の大乘菩薩の修得した空三昧を説き、漢字異訳は正しく如幻三摩地（無量印法門）經を經題としている。大乘經典では如幻三昧は菩薩の三昧として密教經典に至るまで一つの潮流を形成しており、本經の所説も特異な性格をもっている。第三点は、本經が今後研究される意義である。す

なわち訳者曇無竭は本経を闍賓で入手しており、このことは、最近問題とされている『観無量寿経』等のいわゆる観経類の成立問題や闍賓仏教（カンシュミール、ガンダーラ）の事情を知る上でも注目されなければならない。そこでまずはじめに本経の梗概をのべておこう。

仏説法の会処は波羅奈鹿苑、会衆は弥勒、文殊等六十の正士（菩薩）で、その中の華嚴菩薩と仏との対話で展開する。会中の六十の菩薩はすでに如幻三昧を得ているが、実は西方安樂世界において今現在説法する阿弥陀仏の待者である観世音と得大勢（勢至）二菩薩も同じくこの三昧の修得者である。仏は娑婆世界にかの安樂世界の二菩薩を招き、その説法を聴くことを欲するならば、この会処の善根を積んだ衆生は、如幻三昧を得、しかも安樂世界に生じて不退転を得ることができると説く。これを聞いた会中の善男子、善女人は二菩薩にその教説を聴きたいと願う。仏が白毫より放光すると、安樂世界の衆生は娑婆世界の釈迦牟尼を見、また釈迦の会座の大衆は阿弥陀仏を見、ともに二尊に対して称名念仏する。そこで釈迦は安樂世界の二菩薩に如幻三昧の説法を求め、この要請に対して二菩薩は阿弥陀仏の許しを得、娑婆世界に来訪することを決意する。

本経所説の如幻三昧の概念内容とその修得について經典には「一法を成就して如幻三昧を得る。この三昧を得、善方便

を以ってよくその身を化し、衆の形類の所成の善根に随ってしかも説法をなし、阿耨多羅三藐三菩提を得せしむ」とあり、一法とは「（一切は）依止無し。三界に依らず、また内に依らず、外に依らず、無所依において正觀察を得」と説く。<sup>(5)</sup> また無所依の理由は、一切法は因縁所生であり、一切は虚仮なるものとして存在する無生の法だからである。この一切の如幻性を悟ることが、菩薩の真実道の開顕であると説くのである。また三昧によって化身を現じ、衆生の善根に随って教化し、菩提を成就させることが菩薩の大慈悲の実現であり、これが如幻三昧の究極の目的であるとす。

仏の懇請を受けた二菩薩は四十億の菩薩を従えて娑婆世界に趣くのであるが、そのとき如幻三昧によって巨大な宝台を仮作、現出する。宝台は七宝に莊嚴され、その中心の師子座には相好を具えた化仏が坐し、また宝台上には無数の化玉女が侍る。とき至ってかの宝台の移動が現出される。すなわち「譬えば力士の臂を屈伸する項の如くに彼の国より没して此の世界に至る」とあるように、宝台が安樂世界から没すると同時に忽然と娑婆世界に姿を顯わし、大功徳莊嚴を成就するのである。この光景に会中の人々は、誰人の威神力のなせる業かを疑う。釈迦は願行清浄なる観音、得大勢の如幻三昧によると説明する。

そして釈迦が自らの前生を説き、かつて無量の法門を修行

したこと、さらに二菩薩が釈迦の前生である威徳王の王子であり、過去に空觀を修したことを偈頌をもって語る。また安樂世界の阿弥陀仏の寿命は有限で、将来、般涅槃し、その後には觀世音が成仏して仏国土を成就し、さらに觀世音の涅槃の後に、得大勢が成仏し国土を成就すると説く。

經の末尾は二菩薩の授記と会衆の授記が説かれ、二菩薩の仏国土での転女成仏が実現されることを説いて經典は終る。

以上の梗概から本經が淨土教を骨子としながらも、そこに般若經等大乘經典にある如幻三昧という空思想とその実践を介在させることによって、いうならば西方安樂世界を娑婆世界に顕現させようとする意図を看取しうるのである。しかもこのような如幻三昧による娑婆世界の一元性、あるいは相即性を自覚させるべき、いわば舞台装置の役を担っているのが、化作された宝台である。この宝台の化作とその移動とは何かが問われねばならない。ここでわれわれは前述の如くに、本經が觀世音菩薩を主役にした經典であり、同様に經中に觀世音菩薩の普門の教説を有する『法華經』との關係を考察する必要に迫られることになる。

法華經と阿弥陀三尊 まず第一に羅什訳法華經に説示される淨土教、就中、阿弥陀仏と觀世音、勢至二菩薩について考えておかねばならない。すなわち、法華經化城喻品第七<sup>(6)</sup>には大通智勝如来に十六王子があり、成仏して十六仏となり、

その中の西方二仏として阿弥陀仏と度一切世間苦惱仏がある<sup>(7)</sup>と説く。また藥王菩薩本事品第二十三<sup>(8)</sup>には、この品を受持する者は女身を受けず、命終の後、阿弥陀仏の安樂世界に往生すると説かれ、この二つの叙述は梵本と漢訳に共通して現われている。特に藥王菩薩本事品は、法華經諸品成立史の上からも後世の付加と見られており、学者が指摘するように、これら二品の阿弥陀淨土思想が法華經成立に無関係でなかったことを示す例である。その最たるものが觀世音菩薩普門品第二十五の偈の最後に追加され、梵文のみに伝えられた七偈で、ここには阿弥陀仏信仰が端的に現われている。その中の四偈を示そう。

世自在王を導師とし、世間から供養された法藏比丘は幾百劫もの間修行して、清らかな無上のさとりに到達した。(28)

右あるいは左側に立ち、アミターバ導師をおおぎつつ、幻に等しいという三昧 (magyo pama samadhi)<sup>(9)</sup>によって、一切の国土に行き、勝者を供養した。(29)

西方に、幸せの源泉であり、清らかな安樂世界 (Sukhavati) がある。そこにじつに人びとの調御者であるアミターバ導師が今住しておられる。(30)

そこには女性は生まれないし、男女の情交もまったくない。かれら勝者の子供たちは自然に生まれて、無垢蓮華の台(胎)に坐っている。(31)

以上の四偈の中、特にここで注意したい第一点は、阿弥陀仏の本生話が無量寿経系の法蔵説話であること。第二点は、阿弥陀仏の左右の脇侍（但し、ここには観音 勢至の名称は謳われていない）が、「幻に等しいという三昧」、すなわち如幻三昧によって一切の国土に趣き、諸仏を供養したと説き、観音授記経の所説に極めて近似していることである。第三点は、安楽世界に女性が生じないとする転女（成仏）説である。これらは法華経梵文成立の時期に阿弥陀仏信仰が無視できない状況があったことを推考させうる。それとともに阿弥陀の本生話は一先ず置くとして、梵文法華経の観音信仰が『観音授記経』の成立に無関係ではなかったことを予想させうる。

**宝台化作と見宝塔品・妙音菩薩品** 観音授記経で二菩薩が娑婆世界に往詣するにあたり、如幻三昧によって巨大な宝台を化作する経説を示そう。

爾の時、観世音及び得大勢菩薩摩訶薩、四十億の菩薩とともに前後围绕され、彼の世界において神通力をもって各の眷属のために四十億の莊嚴宝台を化作す。この諸宝台、縦広十二由旬にして端嚴微妙なり。<sup>(11)</sup>

と七宝と諸華に莊嚴された宝台の様子が記される。宝台上に化玉女八万四千が音楽を奏して待り、また台上に衆宝に飾られた師子座があつて、座上にまします化仏はみな三十二相、八十種好で身を飾っている。宝台の莊嚴は、諸種の真珠を貫

『観世音菩薩授記経』と『法華経』（大南）

ねた輪を懸け、末香の盛満した宝瓶があり、妙蓋で覆われている。さらに台上に宝樹が林立し宝鈴がそれを覆う。宝樹の間に八功徳水の満ちた七宝の池があり、池中に雑蓮花が咲きほこるのである。ところで、本経の宝台は、如幻三摩地経では「殊妙の楼閣」<sup>(12)</sup>と漢訳され、チベット訳<sup>(13)</sup>では *Khan pa brtsags pa, kufagara* とあるから、漢字訳と同意の楼閣の意である。宝台よりも楼閣の方がイメージは描き易い。

かような安楽世界の建造物の種類や容姿は、『無量寿経』卷上の浄土莊嚴の経説<sup>(14)</sup>に見、また『観無量寿経』では、第六総想観に「衆宝の国土の一一の界上に五百億の宝楼閣あり、その楼閣の中に無量の諸天ありて、天の伎楽をなす」とあつて、極めて『観音授記経』の宝台の記述に類同する描写を見ることができるといえる。しかし、観音授記経ではこの安楽国の宝楼閣が二菩薩の三昧力に化作され、娑婆世界や十方世界にまでダイナミックに移動するのである。この発想は一体どこから生まれたのであろうか。

ここで再び法華経の見宝塔品と妙音菩薩品の所説に注目してみたい。見宝塔品第十一における宝塔涌出の場面である。<sup>(16)</sup>

宝塔品は、地より涌出し、空中に住する七宝に莊嚴された巨大な宝塔中から法華経の説法の真実なることを証明する声が聞こえ、次いで十方分身仏が集会した上で塔が開かれるや釈迦仏がその中に入り、釈迦・多宝の二仏が並坐したと説か

れる。ここでは、すべての法華經を説く者のために宝塔をその前に湧出せしめ、また釈迦の分身仏を礼拝供養したいと願う者のために仏が白毫より放光する。すると十方の無量国土が浄土と化し、人々は諸仏を見る。

釈迦仏のみもとに訪れた諸仏たちは待者を従えて宝樹の下にある巨大な大宝校飾の師子座に結伽趺坐し、待者を釈迦仏のもとに挨拶に遣わす。その情景はつぎのようである。

善男子よ、汝は耆闍崛山の釈迦牟尼の所に往詣して、わが辞の如く曰せ、少病、少悩にして気力あり、安樂にましますや、及び、菩薩、声聞衆は、悉く安穩なりや、否やと。<sup>(17)</sup>

そして宝華を供養し、宝塔を開くことを願う。この經説は、観音授記經に宝台が娑婆世界の釈迦仏の説法処に現出され、そこを訪れた諸菩薩が仏を礼拝した後で、安樂世界の阿弥陀仏から託された挨拶の辞、すなわち、

世尊よ、少病、少悩、起居輕利にして安樂に行ずるや否やを問訊せよ。<sup>(18)</sup>

という文言に類似してもいる。以上、見宝塔品における多宝塔の地涌、空中住在の壮大なイメージと十方諸仏の釈迦仏の会処への移動というダイナミックな描写は、恐らく観音授記經における宝台（宝樓閣）の安樂世界から娑婆世界、釈迦の説法処への移動の經説とその発想の伏線ともなるろう。

『観音授記經』は阿弥陀仏の般涅槃と合せて二菩薩の成仏

とその入滅をも説く。この教説を聞いた会中の六十億衆は南無十方涅槃佛と同唱して菩提心を生じ、仏はこれらの会衆に授記を与える。また二菩薩も重ねて会衆に十方諸仏を見せしめ、授記する。しかも会衆は、このとき「甚幸なり世尊よ、これ諸の如来、この大士のために是くの如き記を授けたらう」と二菩薩が諸仏から授記されたことを讚嘆する。『観世音菩薩授記經』の経題をもつ由縁である。ここに授記が説かれる背景に、法華經の提婆達多や竜女の授記思想が伏在していると考えられる理由から、あながち不可能ではないかもしれない。

さらに本經は受持・読・誦・解説・書写等、法華經の五種法師に類するものの無量功德を説き、最後に「女人有りて是くの如き法を聞かば、女身を転ずるを現す。女身を転じ已らば當に為に授記すべし」として女人は離垢如来となると説いて經は終るのである。以上、本經のいわゆる流通分における会衆と二菩薩への授記と広宣流布と転女成仏の三つの教説を示したが、これもまた羅什訳法華經の見宝塔品と提婆達多品への展開に極めて類似性をもつかに推考される。

ところで、羅什訳提婆達多品の成立については、その原訳に本来、この品が存在したかどうかを検討した研究がある。<sup>(19)</sup>

これによれば羅什訳（四〇六年訳出）より凡そ二世紀以前に訳出された竺法護訳『正法華經』には、すでに宝塔品中に梵志

品（提婆品）を含んでいるのであるから、提婆品の形成及びその法華経への編入は、すでに梵本の流伝の過程でなされたことみなければならぬとし、梵蔵漢諸本には、宝塔品に提婆品相当部分を含むことを検証されている。提婆達多品の前半は悪人提婆の成仏、後半は竜女の成仏を説き、法華経弘通の功德を証明し、滅後の弘経を勧奨するという内容である。羅什訳の如くに両品が別立せず、梵蔵漢の多くが宝塔品中に提婆品を含んでいるのであれば、見宝塔品の展開は、宝台の出現から授記、転女成仏へと展開する『観音授記経』の展開とほぼ対応するかの如くである。

さらに妙音菩薩品第二十四では、無量の三昧を得た妙音菩薩が淨華宿王智仏の許しを得て娑婆世界の釈迦仏を往訪する。その有様を経は、「時に妙音菩薩、彼の国より没して、八万四千の菩薩と俱共に発来れり」とのべ、菩薩の真金色の身を乗せた七宝の台は、「虚空に上昇して地を去ること七多羅樹なり」と説く。釈迦仏に詣でた妙音菩薩は、淨華仏に託された、前述の見宝塔品と同様の言辞を連ねて挨拶し、さらに塔中の多宝仏をも訊ねる。最後に釈迦は、妙音菩薩が過去の修行によって現一切色身三昧を獲得し、種々の身に变现して衆生に法華経を説いていることを明かす。以上の本品の所説は、これまた『観音授記経』に觀世音菩薩が安樂世界から娑婆世界に來至する経相に一致し、法華経との濃密な關係

を一層、窺わせるものである。

- 1 『正蔵』五五・一一三c—一一四a
- 2 藤田宏達『原始淨土思想の研究』三四一頁、香川孝雄『淨土教の成立史的研究』一三八頁以下。
- 3 拙稿「如幻三昧と弥陀三尊」（『淨土宗学研究』二十一号）
- 4 拙稿「觀無量壽經」の成立と禪觀經典」（『大正大学研究紀要』八〇号）
- 5 『正蔵』十二・三三三c
- 6 『正蔵』九・二五c
- 7 『正蔵』九・五四b c
- 8 石上善広「淨土思想と法華経の交渉」（『法華経の文化と基盤』）四六八—九頁
- 9 H. Kern and B. Nanjio; Saddharmapundarika. St. Péterbourg. p. 454, 5-6, Shoko Waranabe; Saddharmapundarika Manuscripts Found in Gilgit, Part. II, p. 290. 名 U. Wogihara and C. Tsuchida; Saddharmapundarika sūtram, p. 372 の註には、チベット訳を参照して如幻三昧と見。
- 10 註（8）石上教授訳
- 11 『正蔵』十二・三五四c
- 12 『正蔵』十二・三五九c
- 13 『北京版西蔵大蔵経』三二卷五四—二一四
- 14 『正蔵』十一・二七一a
- 15 『正蔵』十二・三四二c
- 16 横超慧日「多宝塔思想の起源」（『印仏研』二—一）、紀野一義『法華経の探求』一八七頁以下
- 17 『正蔵』九・三三b
- 18 同様に從地涌出品第十五（同四〇a b）にも見られる。なお初期經典には弟子や在家信者がブツダの安否を「世尊は無病強健に在らずや（arogocceva bālavā）SN. V1, p. 405-6」と尋ねる例がある。
- 19 『正蔵』十二・三五七b
- 20 『正蔵』十一・三五七c
- 21 塚本啓祥「提婆品の成立と背景」（『法華経の成立と展開』所収
- 22 『正蔵』九・五五c

〈キーワード〉 觀世音菩薩、如幻三昧、宝楼閣、鬪寶仏教

（大正大学専任講師）